

記憶によって綴られた鎮魂の書

——『嵐を生きた中国の知識人』を読む

李 梁

一、
仮に「士」という階層の現れが、知識人の誕生とみなしてよいならば、中国知識人の歴史は、少なくとも二千五百年前の春秋戦国時代に遡ることができであろう。伝統的中国知識人としての士大夫階層は、たとえA・グラムシやE・サイードの意味する知識人と同一視できないとしても、「修齊治平」という理念、宋儒范仲淹の「先憂後樂論」に象徴されるように、つねに天下国家のことを己のつとめとし、歴史と文化の創造、継承において枢要的な役目を演じてきている。だが、一方では、秦以降の大一統の専制的中央集権体制との間に絶えず緊張、軋轢が生じ、漢、宋の太学生運動、明の東林復社運動のように、幾度も歴史の惨劇が繰り返されていたのも、また事実である。と

ころが、規模にしても後世に残った傷の深さにしても、そのいずれも現代中国、なかんずく一九五七年からの「反右派運動」、および一九六六年から一九七六年での「文化大革命」期を超えるものはずないと言ってよい。

二〇〇七年十月、邦訳刊行された『嵐を生きた中国知識人』(集広舎、以下「本書」)は、まさしくそういう時期に照準を当て、激しい運命の浮き沈みを経験した現代中国の「高級知識分子」の生き様を淡々と綴った回想録風の著書である。著者の章詒和は、一九四二年の生まれ、毛沢東が「欽点」(直指名)した最大の「右派分子」章伯鈞の次女で、現在中国芸術研究院戯曲研究所研究員、博士指導の教授資格をもつ方である。著者は、多分に自身の資質と境遇から得た驚くべき記憶力で、十

章詒和著／横澤泰夫訳

嵐を生きた中国知識人

——「右派」章伯鈞をめぐる人びと



A5判 416頁

[3990円]

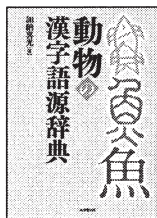
集広舎発行／中国書店発売

代頃に見聞きしたことと、後に収集した資料の間を縦横に行き来し、時代に翻弄された身辺の「高級知識人」の人間模様を「細部の描写を通して歴史的記憶を再生」(日本語版序)させている。その意味で、本書は、個々に検証すべき点があるうが、もはや単なる個人的回顧録の域を超えて、現代中国の知識人史、または思想史の重要な一断面を浮き彫りにした、鎮魂の書とも言えよう。

二、

本書の原著に三つの版本がある。中国当局にとって不都合な部分が「二万字ほど」削除された中国大陸版(書名は『往

東京堂出版



植物の漢字語源辞典【最新刊】

古代人はいかに植物のイメージを字形に託したか
加納喜光著 植物の漢字五〇〇語を収録し、中国の古代人は
いかに植物のイメージを字形に託したか。その源流をたどり、
語源・字源について漢字本来の意味を詳細に解説。中国と日本
との意味の違いも記述。四六判 四六二頁 定価三九九〇円

動物の漢字語源辞典

加納喜光著 漢字・国字合
わせて600語の動物漢字について、その語源・字源を
中国での使い方もしっかり
させるように解説。3990円

〒101-0051
東京都千代田区神田神保町1-17
TEL 03-3233-3741
http://www.tokyodoshuppan.com

事並不如煙」、大陸版と同名の台湾版（二〇〇四年）および牛津大学出版社（Oxford University Press）から刊行された香港版（書名は『最後の貴族』、二〇〇四年）というのは、それらである。香港版は、大陸版で削除された部分を原状回復した完全版である。邦訳は、すなわち香港版によってなされたという。ついでに触れるが、本書およびその後立て続けに出した二点の著書、つまり『一陣風、留下了千古绝唱』（牛津大学出版社、二〇〇五年）、『俗人往事』（湖南文艺出版社、二〇〇六年）は、ともに内容が「許容の限度を超えた」ため、目下、中国当局からの発禁処分を受けている。

とりあえず、本書の内容構成の概要を

示しておこう。

本書は、邦訳版序言、自序および訳者あとがき以外は、それぞれ

- 一、有情と無情の間——史良の横顔
- 二、報道の自由に賭けて——儲安平と父の握手と別れ
- 三、君子の交わり——張伯駒夫妻と両親の絆
- 四、最後の貴族——康同壁母親娘の印象
- 五、この人の深い寂寥——聶紺弩晩年の断片
- 六、見果てぬ夢の果てに——羅隆基の素描

という六つの章から構成されている。各

章はそれぞれ独立しているものの、登場人物は、他の章にも交互に現れ、それがゆえに、内容的に前後呼応しあい、本書の有機的一体性を際立たせている。ここで、試みに、主な登場人物を組別に分けて本書の内容を検証してみよう。即ち、著者の父の章伯鈞、史良、儲安平、羅隆基は一つのグループ、張伯駒、潘素夫妻、康同壁、羅儀鳳母親娘はもう一つのグループ、そして最後は聶紺弩というふうにある。

三、

第一グループの面々には、生い立ち、学歴及び職歴がそれぞれ違うものの、一つの共通点がある。つまり、一貫して積

極的に現実の政治に関わっていた、ということである。例えば、弁護士出身の史良は、一九三六年に発生した有名な「七君子事件」(三九頁)の唯一の女性として、早くから政治の世界で頭角を現している。章伯鈞、羅隆基とも、一九四一年春「三党三派」を糾合して成立した民盟(中国民主政団連盟)創立期の中核メンバー(章は組織部部長、羅は宣伝部部長)である。

そして、民盟は、抗日戦争期は勿論、国内戦期にも、一貫して国民党の一方独裁反対、憲政の擁護、連合政府の実現をめざして積極的に共産党と統一戦線を組み、事実上、共産党の政権奪取のために、いわば敵後にいる「第三の分遣隊」として殊勲を立てたのである。建国初期、章伯鈞、史良、羅隆基は、みな民主党派の身分で、共産党政権の大臣まで務められたのは、そうした歴史経緯が背後にあったからであろう。しかし、民盟及び他の民主党派の知識人は、共産党政権との蜜月関係がそう長く続かなかった。本書にも触れられているように、新政権成立直後から展開された一連の政治キャンペーン

(鎮反、三反、五反、とくに知識人の思想改造など)を余儀なく経験させられた知識人は、やがて理想と現実との落差の大きさに落胆し、多くは鬱屈とした気分

に包まれたというのは、事実である。それは、一九五七年後半から共産党の整風(風紀肅正、思想認識の画一化)を助けるという名目で実施された「大鳴大放」(思いう存分意見をいう)を機に、一気に噴き出したのである。章伯鈞の「政治設計院」、羅隆基の「平反委員会」、儲安平の「党の天下」という三大「反動理論」は、代表的なものとしてあげられよう。若い頃欧米に留学し、欧米流民主主義に親しみ、深く共感を抱くかれらにとってみれば、そういった主張は、いわば民主政治の常識として至極当然のことであるに違いない。「党が国家を指導することと、この国家が党の所有になることとは決して同じではない」(八九頁)、「ある政党の党規約が別のある政党の指導を受けるとはつきり記述している例は世界にただの一つもなかった」(三四〇頁)といった儲、羅の発言は、民主党派の政治理念とその心

情の代弁にはかならない。だが、まさにそういった主張こそ、毛沢東の神経をとがらせ、一夜にして整風を反右派運動へと舵を変えさせたのであろう。

なぜ毛沢東は豹変したのか。本書で次のようなエピソードを披露して説明を試みている。つまり、「現在はプロタリア階級の小知识分子がブルジョア階級の大知識分子を指導している時代だ」(三四八頁)という羅隆基の発言が毛の耳に伝わり、「深刻な文化的蔑視」(同上)として受け止めたからである、という。確かに、若かりし頃、北京大学図書館の臨時職員を務めた時、毛が「ブルジョア階級の大知識分子」から受けた差別を考えると、それは一見してもっともらしい解釈であろう。しかし、それは興味深い視点であっても、歴史的説明にはなりえない。毛の豹変は、折から発生したフルシチョフのスターリン批判(一九五六年)、ハンガリー事件(一九五六年)および上述の「右派言論」とむろん無縁ではないが、あくまで共産党政治の本質、あるいは毛の理想社会の青写真に根源的要因を探る必要が

あろう。しかも、その完全な解明は、中共の各時期における機密の公文書の解禁を待たねばならない。

本書では、「最も訴えたかったのは、共產党の政治」（訳者あとがき）だという。では、共產党の政治の実態は一体どのようなものだったろうか。それは一言で言えば「まったく画一化された生活、観念、それに思考方式」（二六八頁）を支配下のすべての人々に強いていく、ということである。今日の中国では、表面上、むしろ隔世の光景となったが、反右から文革期までは、まさにそのような画一化の社会であった。そこで、詩歌詞曲、書画、骨董品、京劇の世界に浸り、また生来の「貴族的」、欧化のライフスタイルを生き甲斐とする張伯駒夫婦、康同壁母娘の境遇がいかにかりのものだったかは想像に難くない。著者自身は、明らかに彼らと最も精神的に共鳴している。張家での絵の手習い、康家での避難生活、とくに「兩章密会」（章伯鈞と、「七君子事件」で拘束された知識人の一人であった章乃器との密会の場面）のように、本書の醍醐味は、

実にこの第三章と第四章の行間に凝縮しているといえよう。紙幅の関係で敷衍することができないが、要するに、張伯駒夫婦の優雅さ、康同壁母娘の「貴族的」情趣と俠義心、等々は、どれも当時の現実社会と相容れないものばかりである。それにもかかわらず、例えば康同壁の誕生日祝いの際、来賓達が各々持参してきた華やかなチャイナドレスとハイヒールを康家の屋外で急いで着替える情景は実に興味深い。それは、表面上、或いはありし日への郷愁とも見て取れるが、突きつめて考えれば、どんな状況下でも、可能な限り、彼らは、決して心の自由を捨てたくなかったし、捨てていなかったことを物語っているであろう。そういう点において、従来から恬淡無欲さを本懐とする聶紺弩も頗る類似している。

自称「小学校卒」の聶紺弩は、本書の主な登場人物の中で、実は最も学術的成果をあげた人だといえる。それは、十大卷に上る『聶紺弩全集』（武漢出版社、二〇〇三年）をみれば一目瞭然である。しかし、聶紺弩は、決して書齋型の学究で

はなく、寧ろ波瀾にみちた経歴の持ち主らしく、自由の精神が横溢した深い洞察力をもつ。『水滸伝』の続編を書きたした金聖歎をこよなく愛し、中共の牢獄で、『資本論』を十七回も読んだ「最大の感想は理想への懷疑だ」(三〇四頁)というふうに関心を披露したのは、その証であろう。著者が、晩年の聶紺弩の深い寂寥感に深く共鳴を抱いているのは、同じく文学的情趣のほか、何よりも彼の、一種の達観の境地に到った自由の精神そのもののためではないかと思われる。

四、

前述したように、共産党政治のありようを問うのは、本書の主題である。それを裏返せば、つまり個々の人間、ここでは、主として知識人の自由の問題を問うことでもある。しかし、本書は、決してこれら知識人のために「聖なる人間像」を描こうとは思わない(張均「夜読章詒和」『三十一世紀』、二〇〇八年四月号参照)。確かに、本書に描かれた知識人達は、常人と同じく名利欲、内ゲバ

ないし裏切りといった「小節」もあるし、また、必ずしも十全な意味の自由主義者であるとは言えないかも知れない。例えば現実認識、とりわけ共産党政権の有り様への予見において、胡適ら自由主義者に比べれば、立場こそ違うものの、やはり甘かったと言わざるをえない。この点について、もう一步踏み込んで掘り下げてはしなかった。とはいえ、著者は特有の資質と実体験を通して、個人の記憶を集団の記憶、ひいては民族共同の歴史的记忆として昇華させることに成功している。それが、本書の価値を不動のものにしたと言えよう。

最後に、もう一点だけ触れておこう。つまり、邦訳版についてである。多少翻訳を手がけた経験のある筆者も、翻訳は骨の折れる難業だと非常によく分かる。それだけに、本書の邦訳者が、精一杯努力し、一人で本書の翻訳を成し遂げたことにまず敬意を払わねばならない。だが、本書の邦訳は、いわば「直訳」、「硬訳」のためか、原著の優雅で流暢な筆致に比べれば、邦訳版は残念ながら硬くて

非常に読みづらい。それから、一々列挙する余裕がないが、誤訳も年代の錯誤も目立っている。編集の問題もあろう。なお、ふつう、こうした訳書の場合、大抵専門的知見による訳者解説を最後に附すべきであろう。邦訳版にはいちおう「訳者あとがき」があるが、それは短しい、また必ずしも専門的な知見によるものとは言い難い。ともかく、文学的価値にしても史料価値にしても、かのベストセラーの『ワイルド・スワン』を遙かに超えた著書であるだけに、広く江湖の読書子に読まれてほしい。しかし、現にその願いは、恐らく翻訳の出来ぐあいであうことが難しかったのではないかと危惧している。願わくば、筆者の心配が杞憂にすぎないことを切望してやまない。

(りりょう 弘前大学)

